

山登りで日本を元気にしたい

岩崎元郎さん

中高年を百名山に駆り立てた岩崎元郎さん。今度は「一億二千万人総登山者化計画」なるものを提唱してらっしゃいます。その行動計画は「みんなで登ろう、ぼくのふるさと八百名山」。

きっかけは、バーチャルゲーム CM で、画面の中でボクシングする少女たちを見たこと。この娘たちが本当にリングに上がって打ちあったら、見えるものも感じるものも全然違うはずだと、現実には勝る体験は無いのに、と思ったことだったそうです。日本がおかしい。登山という現実体験を通し、みんなに元気になって欲しい、という思いから、誰にも身近なふるさとの山登山を呼びかけています。

(インタビューと文：張晶子)

◆百名山おじさんに至る山との係わりを聞かせていただけますか。

一生まれは東京の大井町、育ったのは世田谷玉川中町。中高一貫の駒場東邦に入学し、最初に入ったのはバスケットボール部でした。背が高くなると思ったのですが、3ヶ月で挫折。2年生には赤胴鈴之助人気の影響で剣道部、3年では卓球部に入りましたが、いずれもサイズ不足で挫折。

高校1年の秋、友人でボーイスカウト経験者の大川くんと河口湖にキャンプに行ったとき、三つ峠の駅から乗り込んできた人たちが履いていたキャラバンシューズが、そのときから憧れのグッズになりました。1日300円のアルバイトをして、5600円の本物は買わずに、3000円のキャラバンシューズもどきを買って、高1の終わりに20人くらい集めてワンダーフォーゲルサークルを作りました。

それから、丹沢主脈縦走、奥多摩縦走、丹沢沢登り、甲斐駒黒戸尾根、奥秩父、八ヶ岳、と山行を重ね、高3になる春休みには、山岳部に合併して、金峰～雲取の縦走をしました。バテても、バテても行きたくなる、山はそんな魅力を持っていました。

東京理科大に入学したとき、山岳部は遭難事故の捜索活動中だったので、入りませんでした。高校時代の先輩がいた昭和山岳会と、叔父のいた雲表倶楽部の説明を聞きに行き、昭和山岳会に入りました。6年間活動し、1970年に蒼山会同人を創設しました。いろいろな人が集まり、それまでに無い自由な雰囲気のある集団でした。

◆仲間を集めるのは昔からお得意のようですが、無名山塾をつくったのは？

—1981年3月に、蒼山会の仲間を中心に、6人のチームでネパールヒマラヤのニルギリ南峰（6839m）に遠征しました。クーロアールにルートを探ったこともあり、いきなり雪崩にやられ、早々帰って来たわけです。僕たちの選んだのはアルパインスタイルでのヒマラヤ登山でした。ヒマラヤンジャーニーの大河原さんやシーガルトラベルのラムさんとはその時に知り合い、今でも交流が続いています。

無名山塾をスタートしたのは、帰国後の11月です。アルパインスタイルの流れは、同人組織の流行につながった訳ですが、同時に、山岳会に入らずに登山の知識や技術を求めるニーズの受け皿が必要になって来るのではないかと、ふと思ったのがきっかけです。1970年代後半から登場したアルパインスタイルでのヒマラヤ登山は、それまでの山岳会の活動スタイルの基礎になっていた極地法登山とは異なるものでした。それまでの山岳会は、登山者の養成機関としての機能を持っていた訳ですが、その運営スタイルは、集団の力で押し上げる極地法を意識した訓練がその基礎になっていたと思います。

山が好きだからガイドになるというのもあるけれど、ガイドするのではなく、インストラクション（教育・訓育）をしたいと思ったのです。自分で山に登れるようになって欲しいので、登山学校という形をとりました。無名山塾は、岩・雪・沢を登る技術を身につける50歳以下の「本科登山学校」の他、一般コースから頂上をめざす基礎技術（地図読み・天気図・基本ロープワークなど）のための「遠足倶楽部」、岩・雪・沢をめざす中高年初心者のための「みどるの会」本科卒業生のための「ゼミ」などがあります。最近、ユース部門も始めました。年をとっても、いつも山にいられるというのが好きなので、「塾」というスタイルを考えました。

83年にサンシャイン文化センターの中高年の登山教室を開催したのを皮切りに、教室のプラスαとしてのハイキングツアーを始め、その延長で百名山があり、NHKの登山教室につながって行きました。

◆ふるさと八百名山はどうやって選ぶのですか？

—深田久弥さんの百名山と、2004年に僕が選んだ新・百名山は除きます。山の高さや知名度に係わらず、身近にある、みんなを連れて行きたい、こんな良い山があるよ、というのを紹介して行きたいのです。県別登山ガイド（山と溪谷社刊）を参考に、地元の方と相談して候補を選び、登ってみて絞り込んでいます。各都道府県毎に17山（北海道は18山）を選びます。最終的に基準は主観です。誰にとっても、自分の名山があつて良いと思うからです。一人でも多くの人に、山に行くきっかけを作れば良いというのが目的です。

心と身体の花康にとって、山に勝る場所はないと思います。少しでも多くの人に山登りの良さを体験して欲しいですね。

◆山のトイレ&ごみの問題について思うことは？

—Take in Take out は、今や原則になっていますよね。これが定着しつつあるので、山は以前よりゴミが少なくなったように思います。トイレについても次第に改善されているとは思いますが、トイレの無い山域で全てを持ち帰るというにはやはりまだ課題が残っていますね。

◆一人でも多くの人に山を好きになって欲しいという、おせっかいおじさんでアイデアマンの岩崎さん。山を楽しむには技術と知識が欠かせないことを押さえていらっしゃいます。お忙しい中インタビューさせていただき、ありがとうございました。